



War Cry

11月号

福音版
2018
November
No.2774

二〇一八年 十一月一日発行 明治二十八年創刊 福音版・毎月一日発行 広報版・奇数月十五日発行(除く七月)

GOOD NEWS ときのかえ

人々の痛みと神の愛

石川 一由紀

この夏は、度重なる台風、北海道では初めてというほど揺れた地震など、大きな自然災害が相次ぎました。まず、被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。

日本は災害の多い国と言われます。ある統計によると、日本の陸地面積は世界の〇・二八パーセントしかないにもかかわらず、マグニチュード六以上の地震の約二〇パーセントは日本で発生しているとのこと。救世軍は、創業当初から伝道と社会奉仕を、切り離すことのできない一つの働きとしておこなってきました。神の愛によって動機づ



けられて歩む救世軍は、その神の愛を人々に伝え、イエス・キリストの使者として、分けへだてなくすべての人々のニーズに応えることをモットーとしています。

一八六五年に働きを始めた救世軍の創立者ウィリアム・ブースは、イエス・キリストの歩んだ道を自分もたどるようにと示されました。神との関係が断絶し、罪と争いに苦しむ人々へ、神の独り子イエスを与えられた神の深い愛を伝えたいと切望しました。そして、人々の最も奥深いニーズである霊的な求めに応えるためには、世の中で見捨てられていた人々の中で、彼らの具体的な必要に応えることが不可欠であることが示されたのでした。

救世軍の活動の原動力は、キリストが、「群衆が飼い主のいな羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた」(マタイによる福音書9章36節)のと同じ気持ちにあります。人々の痛みに対して、何

とかしたい」という思いと祈りです。

聖書の申命記一〇章一七、一八節には、

「あなたたちの神、主は神々の中の神、主なる者の中の主、偉大にして勇ましく畏るべき神、人を偏り見ず、賄賂を取ることをせず、孤児と寡婦の権利を守り、寄留者を愛して食物と衣服を与えられる」

とあります。弱い立場の人を「愛する」神の存在が私たちを動かしています。それは、時として火事に遭われた方にタオル一本お届けすることしかできない場合もありますし、地域の仕組みの中で、息の長い救援、復興を支援する活動となることもあります。

そのような支援の中で、「災害対応チャプレン」の働き的重要性が指摘されています。米国では、様々な災害の現場で、被災された方々のみならず、大変なストレスを受けて働く消防・警察の背後で心のケアをおこなう存在として活動しています。ボランティアや被災者を支える人々が燃え尽きないように、被災地の心のケアに携わるこの働きを日本の救世軍でも進めてい

きたいと願い、小さな歩みが続いています。

世界的な救世軍の災害救援は、国際的基準であるスフィア・プロジェクト(人道憲章と人道対応に関する最低基準)に基づいておこなわれます。一九九七年にスタートしたこのプロジェクトは、赤十字、赤新月(イスラム圏の赤十字)を中心に、被災地において各救援団体の違いを超えて最もふさわしい救援をおこなうことを目的としています。その背景には、各団体が負った大きな痛みがあります。それは、一九九四年のルワンダ紛争時、各団体の救援努力にもかかわらず、アフリカ大湖沼地域の難民キャンプで、伝染病などにより、一日に二〜三千もの死体が道路わきに並ぶ事態になったことです。

申命記には、人を偏り見ず、弱い人の権利を守り、必要なものを与えられる神の姿が描かれています。キリストが、どのような背景の中にある人々をも等しく深く、憐れまれたように、救世軍もイエスの愛をもって人々の痛みの傍らにいて、人々が神の前に尊い存在であることをお伝えしていきたいと願っています。

(救世軍士官(伝道者))

小さな火を灯し続けたい

死ぬことに恐怖を覚えた小学生時代

私は牧師の家庭に生まれ、育ちました。両親はイムマヌエル綜合伝道団の牧師であり、私が生まれた当時は和歌山の教会で働きをしていました。私は三人兄弟の三男です。

小学校二年生のころ、子どもながらに「自分は汚い心をもっていて、天国に行くことはできない」という思いを強くもっていました。

毎日のように兄弟げんかをし、短気だった私は兄にけんかで勝てないので、いろいろの物を投げつけては当たり前で散らしていました。子どもながらに、「このまま死んだら、神様の裁きを受けなければならぬ」と自覚していたのです。

夜寝る前には「寝ている間に死んでしまったらどうなるのだろう」という怖さ

が襲ってきました。今振り返ると不思議に思いますが、きつと聖霊が私の心に働いていたのだと信じています。

そのような中、ある日曜日の夕方、教会の集会が終わった後に、私は怖くて泣きだしてしまいました。母は驚いて、どうして泣いているのかと尋ね、私は「死ぬのが怖い」と答えました。

母は聖書を持って来て「一緒に祈ろう」と言いました。そして、汚い罪をもっている私のために、イエス様が十字架に架かってくださったことを話してくれました。

その夜、自分の罪を悔い改めてイエス様を信じました。

「子よ、しっかりといなさい。あなたの罪は赦された」(マタイの福音書9章2節 ※本稿の聖書は、聖書新改訳2017より引用)

という聖書の言葉を握って、クリスチャンとしての歩みを始めました。そしてその年の六月に洗礼を受けました。小学校三年生、八歳の時でした。

小学校低学年でイエス様を信じましたが、中学・高校時代は、自分の好き勝手な方向に生活を送っていました。教会の集会には出席していましたが、心はまったく伴っておらず、義務で出席する集会は苦痛以外の何ものでもありませんでした。

高校では吹奏楽部に入り、部活に夢中になっていました。部活と一緒に練習している友人が、自分にとって決して手放すことができない大事なものとなりました。

こうして、部活が私にとっての偶像のような存在になっていきました。

高校一年生の時、イムマヌエル教会のある集会で、部活が私の偶像になっていたことが示されました。けれども、「部活を神様に献げたら、自分には何も残りません。他のものなら何でも献げます。ただ部活だけは勘弁してください」と祈り、神様に部活を献げることはできませんでした。

ところが、神様は一年かけて私のことを取り扱ってくださいました。翌年、両親に異動辞令が出たのです。両親は和歌山教会から神戸

「あなたは私を愛しますか」と問われて

教会に異動となりました。当時、高校二年生だった私は、和歌山に残りたいという気持ちでしたが許されず、高校の編入試験を受け、転校せざるをえなくなりました。自分が一番大切にしていた部活や地元の人たちから物理的に離れなければならないとなりました。

その当時の私にとって、二年連続の受験、新しい環境への適応などは、とても大きな試験の経験でした。

無事に神戸の県立長田高校に編入することができ、再び吹奏楽部に入りましたが、新しい環境に変わり、私の中では、吹奏楽部への思いがどこか冷めてしまい、以前のように熱中することができなくなりました。

翌(一九八五)年、高校三年生になる春休みに、教団の年会に出席しました。ちょうど、教団創立四十周年ということで、大きな集会がもたれていました。そこで、神様が私に語られたのが、ヨハネの福音書21章17節の言葉でした。

「ヨハネの子シモン。あなたは私を愛しますか。」

そのとき私は、これまで自分

が偶像をもった状態で、ペテロ(ペトロとも訳す。ヨハネの子シモンの別名)のようにイエス様を裏切ったことに目が開かれました。自分の好きなものに熱中して、イエス様をないがしろにしてきたにもかかわらず、イエス様が、そんな自分のことを愛し、「私を愛しますか」と聞いてくださったことに気づきました。

そのイエス様の愛を知り、あなたは私を愛しますか、との問いかけに、私はこれまでの不真実を悔い改め、神様の前に「自分のすべてを委ね、献げます」と祈りました。

「もし私たちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます」(ヨハネの手紙第一1章9節)

という聖書の言葉が与えられました。これは私にとって聖潔の経験となりました。また、以前から牧師になるよう、神様からの召しの声を聞いていたので、この時に「自分のこれからの生涯と時間を献げ、主のために使います」と祈り、神学校に進む決心をしました。



茨城県常総市水害の被災地支援で(2015年。後列右から4人目)

救世軍災害対策室 災害対応チャプレン 岩上 敬人

一九九五年―阪神淡路大震災

関西学院大学卒業後に所属教団の神学校に進みまし。一九九四年に神学校を卒業して、牧師となり、出身教会であるイムマヌエル神戸キリスト教会に副牧師として赴任しました。その翌年の一九九五年一月十七日に阪神淡路大震災が起きたのです。

その日、私は教会の早天祈禱会があるため、朝五時過ぎに起床し、教会に暖房を入れて集会の準備をしていました。ちょうどその時、ドーンと地面が突きあがり、震度七の揺れが神戸市長田区を襲いました。私は何が起きているか理解もできず、洗濯機の中に入ってゆすられていた感覚でした。ようやく揺れが収まり、



阪神淡路大震災時の神戸。左下の火災地域が長田区鷹取地区。イムマヌエル神戸キリスト教会も写っている。

停電で真っ暗な中、すでに集会場にいた祖母に「大丈夫?」と声をかけました。祖母は「机の下に潜り込んでから大丈夫だった」と返事してくれました。奥の部屋から「動けないから助けてほしい」と祖父の声が聞こえました。暗がりの中、手探りで祖父が寝ていた部屋に入り、とにかく手あたり次第、祖父の上に積みあがっていた本棚の本を取り除きました。そうこうしているうちに、外から母の声がかえってきました。両親は教会の向かいにある古い木造家を牧師館として借りて生活していました。牧師館は地震で倒壊しましたが、母は奇跡的に無傷でした(父はちょうど東京出張で不在)。

母は、閉じ込められて出られなくなっているところを通行人に助けてもらい、外に出ることができたのでした。その後はあまりにも多くのことが起こりすぎて、まだ整理もついていません。近所の人たちと一緒に、閉じ込められた人や、倒壊した家の下敷きになっている人の救出活動をしました。

また、地震後すぐに火災が近所の鷹取商店街で発生

しました。教会は一時的に避難所となり、たくさんの方々が教会に入ってきました。皆が近くの小学校に避難する中、私は祖母と母を車に乗せて、その日一日は須磨の海浜公園の駐車場に避難して、車中泊をしました。

翌日からライフラインがすべて失われた中で、サバイバルが始まりました。教会の周りにはほとんどの木造住宅が倒壊し、また道路を挟んだ東側は火災で一面焼け野原となつていた状態でした。百名以上の方々が教会のある長田区の鷹取地区で命を落としました。しばらくの間は、自宅を失い、避難所生活をしている教会の方々の訪問、教会の後片付けなどの作業に追われる毎日でした。

そのような中、全国の教会から祈りと支援が届き、不便な中でも神様の御翼の陰に守られ、日々を過ごすことが許されました。



災害対応チャプレンとして

阪神淡路大震災から十六年後の二〇一一年三月十一日、東日本大震災が起きました。その時、私は埼玉県狭山市の教会で、牧師として働きをしていました。地震と津波、原発事故...。甚大な被害と犠牲者のニュースが流れる中で、心の奥底に封印していた阪神淡路大震災での被災の記憶がよみがえってきました。けれどもその時に何もできなかったことや災害の備えがないまま、訳もわからず、自分と家族と教会のことしか考えられなかったことなど、今も大きな痛みとして残る思いが心を占めたのでした。

〈何かできることはないだろうか〉そう思っている中、同年五月に不思議な導きによってクラッシュ・ジャパン(クリスチャン災害援助団体)でボランティアをする機会が与えられ、そこから被災地での支援活動に関わるようになりました。

やがて、日本福音同盟援助協力委員会やDRCネット

ト(災害救援キリスト者連絡会)などをプラットフォームとして、災害対応チャプレン委員会が結成されました。その委員会で、アメリカの救世軍から、災害対応チャプレンの指導者であるケビン・エラーズ夫妻を迎えての最初の研修会がおこなわれることになりました。私は、委員会のメンバーとして教材の翻訳に携わりながら、災害時の心のケア、霊的ケアの大切さを改めて認識しました。救世軍を中心に進められているこの災害対応チャプレンの働きこそ、日本の教会に求められている一つの宣教のかたちであることも確信したのでした。

やがて臨床心理士である妻の真歩子も加わり、救世軍でのチャプレンの働きに夫婦で共に奉仕する特権が与えられています。

神戸での被災経



翻訳した書籍『危機対応最初の48時間』(いのちのことば社刊 定価1,600円+税)

クリトリ
ご住所
ご氏名
ご氏名

私の近くの救世軍を紹介してください。
クリスト教についてもつと知りたいたいです。
『ときのかえ』の購読を申し込みます。

この部分を封書か葉書に貼り、裏面の救世軍にお送りください。

創立者 ウィリアム・ブース 大将 プライアン・ペドル (万国本営 英国ロンドン) 日本司令官 ケネス・メイナ (救世軍本営 東京都千代田区) <http://www.salvationarmy.or.jp>



世界をみつめて

〈ナイジェリア〉英国テレサ・メイ首相、人身取引の被害者支援活動を視察

現代の奴隷制度と言われる人身取引の被害者数は、全世界で約2,090万人と推定され、人身取引は麻薬密輸、違法武器取引に次ぐ地球上の犯罪トップ3となっています。(2012年ILO〈国際労働機関〉発表)

救世軍では、全世界で人身取引を未然に防ぐ働きや、被害者救出活動をおこなっています。

8月29日、英国のテレサ・メイ首相が、ナイジェリアのラゴスにある人身取引の被害者支援をしている救世軍のプロジェクトを視察しました。人身取引によって英国に送り出している人数の多い国の一つが、ナイジェリアです。英国の救世軍では、2011年より、人身取引の被害者としてナイジェリアから英国に入国した人を救出しています。英国政府の支援によって今までに約650人を救出しました。

救世軍では、救出した人への心身のケアと共に、適切な訓練を受けたホスト・ファミリーの助けによる住まいの提供をしています。このプロジェクトの特徴は、施設での保護ではなく、家族やコミュニティ自体が、長期的に被害者の自立を支援するとともに、新たな被害者が出ないような働きかけをおこなっているところです。

被害者の多くが性的搾取のための成人女性ですが、子どもや男性もその対象となっています。



〈バングラデシュ〉ロヒンギャ難民キャンプへ、LED照明を提供

バングラデシュの救世軍は、隣国ミャンマーから逃れてきたロヒンギャ難民へ、LED照明とソーラーパネルを提供しました。難民の多くがイスラム教徒ですが、ヒンズー教徒もいます。

2017年8月25日以降、バングラデシュに706,364人の難民が移動し、ロヒンギャの人口が急増しました。難民の約55%が18歳未満で、3%が高齢者、16%が母子家庭です。持続可能なエネルギー供給のために、高齢者、障がいをもつ人、女性だけの世帯など、2,800家族にLED照明と設備を提供しました。キャンプ場での安全確保のためソーラーパネルは昼間に充電され、

夜間には、危険な道を歩けるように明かりを灯すことができます。また、明るくすることで、犯罪や襲撃を減らすことが期待されています。



救世軍とは? What is the Salvation Army? 心は神に 手は人に Heart to God, Hand to Man

救世軍は英国に国際本部を置くプロテスタントのキリスト教会です。創立者は、英国のメソジスト教会の牧師だったウィリアム・ブース。1865年、東ロンドンのスラム街で、どのような境遇の人もイエス・キリストを信じるならば救われる、と伝道を始め、飢えている人には食べ物を、家のない人には宿泊場所を、仕事のない人には職業の斡旋を、アルコールにおぼれる人や搾取されている女性たちには、回復・更生のための施設を提供し、物心両面からの救いを目指しました。やがてこの働きを推し進めるために、軍隊流の組織を取り入れ、「The Salvation Army」と名づけました。



救世軍では、設立当初から女性の士官(伝道者)を積極的に養成し、伝道の最前線での活動に従事させました。救世軍の母と言われる、ウィリアム・ブースの妻カサリン・ブースも自ら説教し、『女性の宣教』など、著書も多く残しています。



日本では1895(明治28)年に働きが始まりました。日本人で最初に士官になった山室軍平は、社会問題に取り組み、廃娼運動や結核療養所設立などに力を尽くして、キリスト教界だけでなく、明治~昭和初期の社会福祉史にもその名を残しました。現在、日本の救世軍では、43の小隊と、19の社会福祉施設、2つの病院(ホスピス併設)を通して、働きを進めています。

11月30日は「社会鍋の日」。社会鍋の募金活動は、1909(明治42)年、失業者へ食事を提供するための米国の救世軍の募金スタイル「クリスマス・ケトル(スープ鍋をぶら下げての募金)」を日本風にアレンジして始まり、街頭募金、歳末助け合い運動の先駆けとなりました。社会鍋に託された資金は、街頭生活者、国内外の災害被災者、高齢者や母子家庭の支援などに用いられています。

(取扱支部)

救世軍は、統一協会、エホバの証人、モルモン教ではおられません。これらの問題ではお悩みの方は、右救世軍にご相談ください。

発行日 発行日及び定価
福音版・毎月一日発行
定価 福音版・一部 四〇〇円
広報版・一部 一〇〇円
クリスマス特集号(十一月一日号) 一部 一〇〇円
振替 〇〇二八〇一五四四〇〇

印刷所 救世軍本営
印刷人 代表者ケネス・メイナ
編集人 寺澤 眞由子

電話 東京(03)三三七〇八八一
〒101-0051 東京都千代田区
神田神保町二丁目十七番